

学校点描

続

朝、外に立っていると、挨拶の声や会釈で返してくれる生徒が増えました。1年生の力かもしれません。

《M中学校》

NO.1

R6. 4. 16

担当：校長

4月11日（木）の2～4時間目は身体計測を学年ごとに行いました。測定場所は別れていますので、1年生の中には、迷子になっている生徒も見られます。

12日（金）は、生徒会主催の新入生歓迎会が3時間目、4時間目をつかって開催されました。生徒会役員の生徒の姿はとても成長を感じます。各委員長が原稿を手にしても、しっかり顔を上げて話をします。T・Rさん、K・Nさん、Y・Mさんは、ほぼ何も見ないで説明しました。しっかり準備してきたのでしょう。K・Tさんは今年のスローガンは『挑戦』で困難なことにも粘り強く挑む姿勢だと話をしてくれました。1年生代表のT・Rさんは『努力し続けること』を目標に掲げました。例年以上の中学生の話す内容とその姿でした。

蛹（さなぎ）の時代

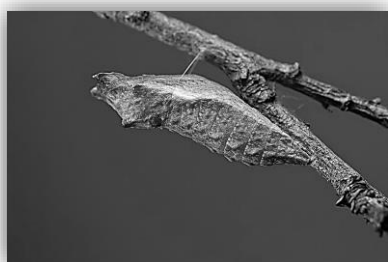
4月7日（日）は午前中2・3年生に始業式を行い、午後は新入生の入学式を行いました。校長式辞で、檀上から初めてみる2・3年生の生徒たちを見ると、その姿は、私の予想以上のものでした。静寂した雰囲気の中にも、凜とした強さを感じます。どの生徒も顔をあげ真剣なまなざしでこちらに視線を投げかける瞳と目が合います。始業式では、『100回叩くと開く夢の扉』の話をしました。



午後の入学式の新入生の姿にも立派なものを感じました。中学の制服に身をまとい、緊張感の中にも、やる気が感じられます。生徒呼名の返事は、とても大きな声で行ってくれました。新入生の代表のことば中でA・Kさんが期待と不安の気持ちを表現してくれました。真新しい教科書を、O・Nさんに代表として渡しました。写真撮影で体育館に集まった新入生の様子をみると、ようやく式の緊張感から解放された地の姿をみることができました。

大人になると、めったに林や藪の中に行くことも少なくなり、蛹（さなぎ）を見ることが少なくなりました。蛹（さなぎ）とは、昆虫の中の一部のもので、成虫になる寸前に行く、ほとんど動かない時期をさします。中学時代は、そんな蛹

（さなぎ）の時期に非常によく似ていると思います。外見では、中がどうなっているのか一切わからない。じっと動かないので、生きているのか死んでいるのかさえわかりません。だからといって、無理やり、蛹（さなぎ）を割って、中を開いてしまうと、幼虫は死んでしまいます。あくまでも、幼虫自身が蛹（さなぎ）の殻を割って出てこなくてはならないのです。子育ても教育もそこが肝心です。



たとえ、周りから“立派”と言われる生徒であっても、また、毎日明るくあいさつを交わしている生徒であっても、見えないところでは、どろどろしたいろいろな思いを持っているのが中学生です。言いようもない苦しさや辛さを、思春期という蛹（さなぎ）の中にしっかりと抱えて、それでもいつか必ず自分から殻を割って出ていきます。保護者は誰でも、子どもには楽な生活、苦勞のない生活、何も問題がない生活を送らせたいという気持ちはあります。ただ、それだけでは、この蛹（さなぎ）から、自分の力で割って出てくる力は養えません。時に、自分と周りの人の力を推し量ったり、自分の力の足りなさに挫折したり、思いが通じない友人関係で悩んだりしたことが、後に、蛹（さなぎ）を破って社会で自律していくときのたくましいエネルギーになるのです。

「もし、100回叩くと開く夢の扉があったとしたら、あなたは どうしますか？ 誰もがみんな99回叩いたら、あと1回がんばろうと思うでしょう。何回叩いたら、この扉が開くのかわからないから、私たちは苦しいのです。」

始業式の私の話です。いつか蛹を破る時の力にしてほしいという思いでした。

ステージ下の2. 3年生の中には、うなずいて聴いてくれる生徒がいました。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp